



Title	高等学校での「自立塾」の実践
Author(s)	馬場, 雅史
Citation	北海道大学教職課程年報, 2, 23-29
Issue Date	2012-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49473
Type	departmental bulletin paper
File Information	Baba.pdf



高等学校での「自立塾」の実践

－「進路指導論Ⅱ」の特別講義－

馬場 雅史

はじめに

本稿は、私が「進路指導論Ⅱ」において担当した2回の授業において検討の素材とした実践の概要、それへの受講生の反応を述べるものである。

1 授業の目的

今日、高等学校における進路指導は、端的にいつて職業斡旋と受験指導とに焦点化されている。深刻な就職難の時代にあつて、職業斡旋は極めて困難な課題となっている。職業体験学習、礼儀作法を含む面接試験対策、各種資格の取得、適性検査への対応、履歴書の書き方などについての指導が実施されている。一方、受験指導については、受験産業が実施する模擬試験のデータの分析、受験校の決定、合格のための講習などに膨大な努力が払われている。難関大学への合格者の増加がしばしば自己目的化され、学校間の競争も激化している。

こうした課題に直面し、改訂学習指導要領は「キャリア教育」を前面に打ち出した。その効果の検証は今後の課題であるとしても、キャリア的成功や失敗をいっそう個人責任のもとへ収斂させようという傾向はむしろ助長されている。

しかし、進路についての教育は、同時に、市民社会を構成する一人の自立的な人間として、また幸福に生きる権利の主体として成長することを保障するという教育としての内容を持たなければならない。言い換えるならば、進路指導は、強制的な労働力の社会的再配分のプロセスの構成部分となるのではなく、人間の成長と自立のための教育的プロセスとして再構成されなければならないといえる。

こうした進路指導をめぐる現状と課題について、受講生自らが経験した進路指導と重ね合わせ、検討することが「進路指導論Ⅱ」での授業の目的である。

2 授業の内容

授業は2回実施した。1回目の授業では進路指導の実際について紹介した。それは、教育課程に組み込まれないいわばインフォーマルな実践ではあるが、進路指導の教育的な再構成を検討するうえでの素材とした。実践を紹介した後受講生から質問、意見を提出してもらった。2回目の授業ではそれに答えつつ、意見交換を行った。なお、それぞれの授業には高校生が参加し、意見を表明した。

3 「自立塾」の取り組み—困難な時代をともに生きる

(1) 「わたし、キャバ嬢になる」

新三年生の担任となった09年4月、進路についての生徒たちとの懇談での発言だ。「大学に進学しないと決めたから、この高校に来た。大学進学希望でなくても面倒見てくれると聞いていた。でも本当は大学に行ってみたい。俺だけじゃない。みんなそう思っている。みんな貧乏だからあきらめている。」ラグビーの選抜チームの一員でもある彼は、その大きな体を小さく折りたたんでいた。「わたし、キャバ嬢になると決心した。何のとりえのない私でも、最初のうち少し我慢すれば、生活していける。おしゃれもできる。」おとなしく我慢強い性格の彼女が、最初薄く化粧していることが気にかかっていた。ぼくは、頭ごなしに「だめだ」といった。彼女は「先生は職業には貴賤がないと言っていたでしょう」と答えた。「もし、先生が君の父親だったら絶対に賛成できないからだ」と応じるのが、その時のぼくには精一杯だった。

貧困と格差が子どもたちを追い詰めている。生活保護世帯の子どもたちを除いて、授業料の未納率は30%を越えた。昨年の見学旅行には28人の生徒が参加できなかった。「一割の生徒が参加できない修学旅行を続ける必要があるのか？」という意見も出された。旅行の日程を一日短縮し、旅行費用を削減して今年度の見学旅行を実施したが、それでも15人が参加できなかった。貧困は子どもたちの希望を奪い、不適切な表現かもしれないが「転落」の際へと追い詰め、ごく普通の学校運営を不可能にしている。

(2) 「自習教室」から「自立塾」へ

「就職希望の生徒の多くは家で勉強できる環境にない。放課後、学校の中に勉強できる場を作ってやれないか？」ということは学年団共通の思いだった。家計を支えるためのアルバイト、兄弟や祖父母の世話、多くの生徒が相当な量の家事の担い手となっている。自分の部屋を持っている生徒もそう多くない。そうでない生徒も部活動や講習で忙しい。「あきらめ」から学習を遠ざけている生徒もいる。空き教室を活用して、何かを教えるのではなく、自習する場を作ろうという計画を学年団は持っていた。学年主任と私が担当者となり、臨教で生徒の自立に強い関心を持っていた若い教師がそれに加わってくれた。

一方、担任として「貧乏だから進学をあきらめた」生徒とは、話し合いを続けていた。昼間働いて夜間通学できる大学があること、入学試験は小論文だけであること、不十分ながら奨学金制度があることなどを、それまで幾度となく話してきたはずなのに、また繰り返していた。5月中旬、その生徒ともう一人が私のところへやってきて、「みんなを集めるから、話を聞いてほしい。先生の考えを伝えてほしい」と言った。数日後、空き教室には十数人の男子生徒が集まっていた。「夜間の大学に行きたい」という生徒もいれば、「無理だ」「どうしていいかわからない」という生徒もいる。現在の生活の厳しさ、将来への希望と不安、親への遠慮や不満、学校への不満と期待が語られた。「また、みんなで話そう」というのがこの日の結論だったと思う。

「自習教室」という学年団の構想は、こうした生徒たちを主体として、6月、スタートした。「バイトの前の30分、部活のあとの30分」を合言葉に、週2回、自由に集まることにした。以降49回、少ないときには2人、多いときには40人を超す生徒があつまつた。学校祭の2日目、「今日はだれも来ないだろう」とたかをくくって職員室にいたら「先生、みんな待ってるよ」と呼びに来られたときは、驚いた。学校祭の興奮でまだ顔を上気させた子どもたちが集まっていた。夏休みには3日間だが「夏期講習」も行った。講習になれていない生徒は「進学講習みたい・・・」と言いながら嬉々として参加した。「自習教室」という呼び名が「自立塾」に変わった。掲示板も廊下にできた。

(3) 仲間の成長を自分の成長へ

当初は「進路について話し合おう」とか「夢を実現するために」をテーマにした。しかし、どうにも物足りなさが残る。互いにもどかしさ感じながら、きまって議論は、自分と社会とのかかわり、社会問題へと逢着する。思い切って、直接社会問題をテーマとすることにした。「貧困」「格差社会」「ワーキング・プア」「環境」「学歴社会」「高校入試」「派遣労働」「ジェンダーバイアス」「裁判員制度」「食の安全」「地域格差と地方分権」「アメリカ大統領選」「自衛隊」などをキーワードに意見を述べ合うことになった。回をおって次第に議論は白熱する。新聞、インターネットを活用して事前に学習してくる生徒が増える。単なる意見交換だけではなく、自分で考えるうえで知りたいことを述べ、求める。そこには生徒同士で教えあう関係ができ、当然教師にもそれは及んだ。社会科の教師は資料を用意し配布してくれた。少なくない教師が授業で話題にし、生徒の求めに応じた。

今回のテーマを掲示板で知らせる。限られた時間を有効に使うために、後半の30分で「作文」を書くようにする。添削は最小限にする。提出された作文から一、二編を匿名で読み上げる。優れた作文と言うことでは必ずしもない。未熟でも鋭い洞察や問題提起を含んだもの、リアルな生活意識を含むものを読み上げるのである。これだけはぼくの専権事項であった。匿名ではあっても、誰が書いたか大方の生徒には察しがつく。読まれた生徒は、顔を紅潮させている。こういう光景は授業でも良くあることだ。しかし、参加者の多くがこれを我が事のようによるこぶのだ。自分の仲間にこんなに鋭い、洞察力のある意見を持つものがいるのだという事がみんなの自信と誇りになっている。「すごい」の声や、拍手が起きる。もちろんそれに批判的な意見も出る。いずれにしても、ある一人の仲間の到達点を、自分が成長する足がかりとして捉える関係がごく自然にそこに生じていたのである。

(4) 「自立塾」は共感と連帯のうえに成り立った

当時のぼくは、生徒たちの意欲の高さや、思いがけない「自立塾」の展開に圧倒され、右往左往していたのであるが、今振り返れば、それは当然の成り行きだったのだらうと思えるのである。

その一つの根拠は、生徒の側にあった。以前担任をしていた生徒たちに、学年団の全面的な協力を得て、「南陵高校生の進路選択と生活意識に関する調査」を実施したことがある（06年3月）。対象は三年生全員である。そこには、「自立塾」や進路指導のあり方にかかわる貴重な示唆があった。

調査項目は多岐にわたるが、たとえば「今日の日本社会に満足しているか？」という質問に、満足0.8%、やや満足5.8%、やや不満25.9%、不満42.5%であった。

「日本社会のどこが問題だと思うか？」では、就職難・失業問題85.7%、学歴格差70.3%、政治65.6%、貧富の差64.1%、環境破壊62.9%、正しいことが通らない社会61.4%、貧困な社会福祉49.8%、男女差別38.2%となっていた。生徒たちは、日本社会に不安を抱き、特に、就職難・失業・学歴格差・貧富の差など自分の社会的自立に直接かかわる問題状況に強い関心を持っていた。この関心に教育がこたえずして、子どもたちとともに未来や自立・進路について探求することはできないであろう。「自立塾」はそこにダイレクトにかかわる取り組みであった。

もう一つの根拠は、教師の側にあった。就職難のもと、就職試験はゼロサムゲームの様相を深めている。誰かが合格すれば誰かが排除される。難関大学をめぐる競争も同様である。「手塩にかけた」生徒の成功はうれしいことに違いはないが、大状況は変わらない。難関大学進学のため、資格の取得のため、膨大な努力が払われている。そこに「歪み」を指摘することはたやすい。しかし、多くの教師は、閉塞的な現状を前に、本来教育がなすべきことを渴望してもいる。現行の進路指導に限界を感じているからこそ、インフォーマルではあるが「自立塾」という試みに多くの共感と協力を惜しみなく寄せてくれたのだ。

当時、ぼくは学校で学校評価を担当していた。政策的に押し付けられた評価にもとより批判的である。しかし、実施しなければならぬのなら、少しでも意味のあるものにしたいて考えていた。そこですべての保護者を対象とした「教育アンケート」を3年間実施した。この「アンケート」には記述式で回答していただく項目が3つある。その一つが「学校の進路指導に何を期待しますか？」というものである。233の回答が寄せられた。圧倒的に多いのは「厳しい現状の中で、子どもは進路希望を決定する過程で悩んでいる。親と連携して具体的なアドバイスを」という趣旨のものである（50）。また、「単に夢を語るのではなく」「学校の都合で進学を押し付けるのではなく」現実的で具体的な進路指導を求める声も多い（16）。進学実績を伸ばせ（16）と就職指導を強めろ（16）は同数である。三学年の保護者からは49の意見をいただいたが、そのうち最も多かったのが「自立塾」に関係するものであった。「子どもが政治について語り始めて驚いた。成長を実感した」「子どもが『はじめて本当の勉強をした』と言っている」「親としての自覚を迫られた」「もっと『自立塾』を広げてほしい」というものである。保護者はこの取り組みを評価してくれている。ここにもう一つの根拠があった。

(5) 「キャリア教育」は教育ではない

99年の中教審答申に初めて「キャリア教育」という言葉が登場した。03年には「若者自立・挑戦プラン」が発表された。06年には「高等学校におけるキャリア教育推進に関する調査協力者会議」が発足した。そして、今回の学習指導要領の改訂は「キャリア教育の推進」を目玉の一つにしている。これがまた学校現場と子どもたちを混乱に陥れることを思うとうんざりである。なぜなら、「キャリア教育」には決定的に欠落したものがあからだ。それは一言でいうなら教育それ自体である。

「自立塾」が教えてくれたのは、自立とはその内部に共感や連帯を含むものであるということである。生徒と生徒の関係、生徒と保護者の関係、保護者と教師の関係、そして教師と生徒の関係が教育的に転換される過程でもあった。そこには共同と連帯が生じていた。一方、「キャリア教育」が想定する関係性は、カウンセラーとクライアントの関係であり、矮小化された個別の関係である。クライアントのキャリア的成功も失敗も個人責任に帰せられる。共同も連帯もそこにはない。政策的な失敗を合理化する手段は、その失敗の原因を個人に帰することだ。「受験学力をつける」「資格を取れ」「社会の変化に対応しろ」「生きる力をつける」そうすれば成功する、というのは脅迫ではあっても教育ではない。だから指導要領のいう「キャリア教育」は、教育を放棄した、責任転嫁のための、それゆえ敗北主義の政策であるといわなければならない。そこに生徒を押し込むわけにはいかない。

(6) 「自立塾」一困難な時代をともに生きる

その後の「自立塾」はどうであったか。生徒たちは「自立塾」の課題をもう一度自分たちの足元に引き寄せた。キャバ嬢になることを「決意」した生徒を参加者として迎えた。ぼくが「だめだ」としかいえなかった進路希望を教育的で共感的な関係のもとで変えさせた。彼女は今、介護の勉強をしている。夜間の大学の職員に来てもらい、学生生活はじめ入試に必要なことについても説明してもらった。授業での教師との新しい関係を要求した。

もちろん「自立塾」は新たな課題をつきつけた。それは、あくまでインフォーマルな取り組みであった。教育課程に位置づけられていない。「自立塾」には延べ800人を越える生徒が参加した。しかし、820人の生徒が一日6時間、200日にわたって生活する学校にあって、それは極々些細な場でしかなかった。多くを占めることが問題ではない。それに確たる意義を持たせ、授業をはじめとする学校生活と教育的に連動させたいのだ。

夜間の大学への進学に進路希望を変えた18人は、全員希望する大学への合格を果たした。全道採用予定1名の銀行に、2名が採用された。採用された女子生徒は、世界同時不況や地域の再生について面接で語ったといっている。昼間の大学に進学した生徒、住み込みで美容院で働くことを選択した生徒、歌手を目指し大手音楽事務所に就職した生徒、就職浪人した生徒など進路は様々ではあった。それが成果であったのかどうかはわからない。しかし、キャバ嬢希望だった生徒は「少しだけ我慢すれば、私でも人の役に立てる」といった。夜間の大学に進んだ生徒は「大学での講義は高校での授業の何倍も楽しい」といっ

た。それは、ぼくにとってよろこびである。困難な同じ時代を共に生きる人間としての連帯を感じたのは、ぼくにとって間違いのない事実である。

4 受講生から寄せられた質問と意見

受講生から提出された質問、感想、意見の概要は以下のとおりである。

①学校それ自体の現状と課題に関するもの

- ・学校現場のリアルな現実、高校生の声を聞いてよかった。(もっと聞きたい！)
- ・高校は「思い出作り」、「最後のモラトリアム」の場としての役割を強めているのではないか？

②子どもの貧困・「自己の内なる貧困」に関するもの

- ・経済的な問題が、これほどまでに子どもたちの将来を奪っている現実に驚きました！
- ・アルバイトは本当に貧困ゆえのものか、「甘え」ではないか？

③教師に関するもの

- ・貧困を知らないで育ってきた私が、教師としてやっていけるのでしょうか？
- ・教師が持つ教育者としての使命を重く感じました！
- ・(馬場は) どうして教師になったのですか？
- ・高校時代作文の指導など受けたことはありません。教科教育、作文の教育「生活綴り方」との関係は？

④「自立塾」では何ができて、何ができなかったのか

- ・「自立塾」に参加しなかった生徒はどうしたのでしょうか？
- ・「自立塾」にマイナス点はなかったのか？
- ・社会問題の議論を深めても問題は解決しない。それなのになぜ、生徒たちは進路選択し
ていったのか？
- ・社会的現実が「あきらめ」につながらないのでしょうか？
- ・「現実」は、そのままでは生徒を傷つけ、萎縮させてしまわないのでしょうか？
- ・「自立塾」的な場は、今の自分にも必要です！

⑤進路指導、「キャリア教育」に関するもの

- ・進路指導はどの程度すべきなのでしょう？
- ・進路指導で教師の役割は「答えを出すこと」なのか「提案すること」なのか？
- ・保護者との意見交換、コミュニケーションの難しさについての経験があれば教えてください？
- ・「ポジティブなアドバイスがほしい」という生徒の声に感動しました！
- ・受験学力、資格も必要では？「わからないところはわからない」でも受験がないなら困らないのでは？
- ・受験勉強への動機付けはどのようにすべきのでしょうか？
- ・資格、検定にはどのような意味があるのでしょうか？語学検定はむしろ搾取になっては

いないでしょうか？

⑥職場としての学校に関するもの

- ・「自立塾」は周りの教師の協力・連携があったからできたのではないか？
- ・教師の負担が増大しているのではないか？
- ・教育行政に（馬場は）何をどのように求めているのですか？

以上の質問と意見に教師と生徒双方が答える形で授業を構成した。それによって、当初想定した授業の目的は達せられたと考える。